

有栖山通信

一人の文士が二次元空間における病的恋愛思想を祖として織りなす純愛物語を近年秋葉原文化が到達した少女人物造形の精華の果てを近年進化したる軽量文芸形態への敬意と繋げ病みし情熱を以て筆を取り鍵盤を叩き電鼠を駆りて織り上げた怨念乃至は情念溢るる射干玉の如き小説也。

第一〇〇〇二十六号

有栖山葡萄



八月二十七日（AM0:00）（鳴海家寝室）

鳴海水月は一人、自室のベッドの上にいた。

時計の針がすべて「12」をさし、日付が変わる。それは彼女が誕生日を迎えたことを意味していた。

三十路を過ぎて大はしやぎで誕生日を祝うほどではないが、さりとして一人ベッドの上で縮こまるようなことでもない。

そして彼女はといえば、床上に膝を抱え足下に置いた携帯の画面をじっと見つめている。

その視線は携帯が、鳴ることを確認しているようだった。

秒針が一周した頃、携帯が振動する。

静かな部屋でやけに大きく聞こえる音に、彼女はビクッと身体をこわばらせる。

そしておそろる画面の文字を確認する。

——着信中 鳴海孝之 090……

彼女はほっとして、身体力が抜ける。

そして着信ボタンを押して、電話にでた。

『寝てたか？』

「……ううん、起きてた。孝之どうしたの、こんな時間に」
電話口から聞こえた声に、彼女は安堵のため息を小さく漏らし答える。

『ああ、いや。誕生日おめでとうって、言いたかっただけだ』

「そうなんだ。ありがとう、孝之」

孝之の素っ気ない言い方に水月はくすりと笑い、すこし落ち着いた様子で話しかける。

しかしその後が続ける言葉を見つけられなかった。緊張が解けた安堵からか、それともまだ思案中なのか、それすら彼女には判らなかつた。

『なんか声の調子が違うように聞こえるけど、なんかあったのか？』

水月は驚く。

その反面、彼なら気がついてしまうかも知れないとも思った。

『いや、いつもとはちよつと感じが違ったからな』

「そう？ 電話で音が少し変わってるからじゃないかな」
彼女はそういつてごまかす。

「別に変わつたことなんてないわよ」

『そうか、それなら良いんだけどな。もう三十路過ぎてんだから無理はするなよ』

「失礼ね、それは孝之だつて同じでしょ」

『ははは、それもそうだな。お互い歳とつたもんだな』

水月はくすりと笑うと、先ほどまでの嫌な緊張がほぐれているのを感じた。

やっぱりこの人といるのは幸せだ、彼女は改めて思った
「仕事、いそがしい？」

『いや、まったく。昼間は夏休みで学生が多いけど、この時間になるとさすがにな』

「それでも夜遅くまでお疲れ様」

出来るだけ優しい声で、いたわる声で彼に伝える。

『ああ、ありがと。まあ、朝には帰るから』

「うん。朝ご飯っていうのかな、支度はしておくから」

『助かるけど、無理はしなくて良いからな。あつ……いらしゃいませ……すまん、客だ』

電話口を塞いだ声が聞こえたあと、彼の慌てた様子が伝わる。

「うん。孝之、頑張つてね」

『ああ、おやすみ』

そうして電話が切られる。

彼女は電話を切ると、そつと胸に抱きしめた。

「たかゆき」

彼の名前を口にする心温まった。

「でも……」

水月は携帯を操作してメールの履歴、フォルダー分けをして保存しているメールをたどる。

保存画面に八月二十七日0時に届いたメールが九通並んでいた。

それは今日届いたモノではない。

二〇一〇年、二〇〇九年と遡り、二〇〇二年を最後に一年に一通だけのメールが保存されていた。

水月はキーを操作し、始めに届いたメールを開く。

『おめでとぅ』

その五文字だけが表示されている。差出人は文字が意味不明な記号となつて、読み取ることは出来なかった。

「今年は、こなかった。もうこないのよね？」

水月の疑問は、さらに不安を掻き立てるばかりだった。

八月二六日(PM23:55)(櫻総合病院・特別病棟)

人払いを済ませて、二人はベッド脇の椅子に腰掛けた。

「夕呼、今年もおきるのかしら」

無言の静寂に漏らした言葉が、薄暗い病室にやけに響く。

「そうね。確証はないけれど、おきる。そう感じるわ」

白衣の女性が二人、ベッドに横渡る一人の女性を見つめる。

「こんなことを言うのは癪だけど、一体なにが起きてるのか皆目もつかない。完全に現代医学の領域を越えているわ。夕呼、

本当はもうなにかつかんでるんじゃないの」

眼鏡の女性が、一瞬悔しげに顔をゆがめる。

「姉さんは一介の高校教師に、なにを期待してるのかしらね。まあそれを知るために、私はここに居る訳なんだけど」

「そうね。私の領域では彼女は救えない」

そしてまた二人は、十年その場に横たわる彼女を静かに見つ

めた。

いつもの戯言

はじめましてとおひさしがり、今日は御立寄りいただきありがとうございます。

「有栖山^{ありすやま} 葡萄^{ぶどう}」と申します、廃業寸前二次創作小説同人屋にございます。

ということで、2011ねん ふゆのコミケ！

「君望 NovelSeries」14作目新刊を出すことができま……せんでした！！

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……………！！

仕事が忙しかったとかそういうことも多少はあったのですが、どうにもこうにもここまで書けないのはありえないレベルで……

すでに日本語が不自由になっているので「やばいやばい」のです。

次の夏、消えていたらそれまでだったと言うことで……

ついつつ一はよくないですね。

駄文をどんどん書き込めるので、推敲した文章を書くことが億劫になりかけてます。

本当にまじめに腰を据えてちゃんとした作品を書くべきですね……

さて、ヤンデレの皆さまに。

ヤンデレアンソロジー「属性y dシリーズ」

諸般の事情（主に〇〇的な理由）により発行が止まっていますが、また新作を出したいと思っています。これは本当に出したくて、でもほんとうにいろいろなじょうがあるのです。そこは察してください！！ ということで虎視眈々と準備はしていたりいなかったり、気長に気長にお待ちくださいませ！

次回イベント予定は、やっぱり夏コミかな。

オンリー等は自分で開催しない限りなさそうですし、それ以前に本が書けるのかね。

今回も短編をつけてみました、お楽しみいただければ幸いです。

これ、小説と言うよりもこれから書く奴のプロットですわ

ということで次回作もご期待くださいませ。

それでは、またどこかでお会いしましょう。

2011年寒さ厳しい大晦日 有栖山葡萄様

2011年12月31日 発行

発行所

ありすやまこうえん
有栖山公園

<http://www.aliceyama.jp/>

budou@aliceyama.jp